

(素案)

新病院の病床規模について

新病院の病床規模については、入院患者の安定した受け入れなど新病院としての機能が十分発揮できる病床数を確保しなければならない。

一方で、病床等が過剰になることは、建築費等のイニシャルコスト、ランニングコストだけでなく、人員等運営経費の負担増大を招き、将来的に経営危機に陥り、結果的に市民に対する医療提供が困難になることも考えられる。

新病院における適切な病床運用等を検討するため、基本構想で示した次の項目を参考に病床数を算出した。

- 1 地域医療構想における播磨姫路圏域の病床数のあり方
- 2 近隣病院等の状況
- 3 宍粟総合病院の推計入院患者数

1 地域医療構想における播磨姫路圏域の病床数のあり方

基本構想 5 ページのとおり、播磨姫路圏域（西播磨地域）における必要病床数については、急性期病床が 603 床、慢性期病床が 141 床多く、高度急性期病床が 17 床、回復期病床が 472 床足りない状況となっている。そのため、新病院にあっては、救急医療等に対処するための一定数の急性期病床数を確保しつつ、一部急性期病床から回復期病床への転換を行う。

※ 宍粟総合病院では、地域医療構想の考え方に即して、令和元年 6 月に一つの病棟（55 床）を急性期病棟から回復期病棟へ転換済（別添「病床機能転換・再編の推移」参照）

○病床稼働状況の推移

	急性期 病床数	急性期 増減数	回復期 病床数	回復期 増減数	合計
30 年 3 月	150(150)	*	55(55)	*	205(205)
3 年 1 月	95(95)	Δ 55(Δ 55)	84(104)	+29(+49)	179(199)

注) () 書きは許可病床数

2 近隣病院等の状況

宍粟市には病院が一つしかなく、近隣にも同規模の病院がないため、基本構想 27 ページで示した新病院の役割である救急医療、小児医療、周産期医療、一般医療の提供を担う基幹病院として必要とされる病床数を整備する。

また市が進める地域包括ケアシステムにおいても、新病院は基幹病院としての役割を果たす必要があり、かかりつけ医からの紹介患者の安定した入院受け入れを行うための病床数を整備する。

今般の新型コロナウイルス感染症患者の増加に伴い、感染症医療における公立病院の役割が重要とされており、新病院では、緊急時において入院受け入れが可能となる病床数を整備する。

3 宍粟総合病院の推計入院患者数

基本構想 20 ページのとおり、入院患者の約 8 割は宍粟市民であること、また一般的に高齢者層の受療率が高いことから、現在の宍粟総合病院の入院患者数を基に高齢者人口予測と入院患者予測の両面から考察する。

算出の基礎となる入院患者数は、病床機能の改編や新型コロナウイルス感染症流行の影響が少ない令和元年度 1 日当たり平均入院患者数 140.6 人（実数）とする。

具体的には、次の手順により算出する。

(1) 将来の 1 日当たり平均入院患者数を算出

$$\begin{aligned} & \text{令和元年度の 1 日当たり平均入院患者数 } 140.6 \text{ 人} \\ & \times \text{ 高齢者推計患者数の増減率} \\ & = \text{1 日当たり平均入院患者数の推計値 (7)} \end{aligned}$$



(2) 類似病院と比較した平均在院日数から平均入院患者数を補正

$$\begin{aligned} & \text{1 日当たり平均入院患者数の推計値 (7)} \\ & \times \text{ 類似病院と比較した平均在院日数増減率} \\ & = \text{1 日当たり平均入院患者数の推計値補正後 (1)} \end{aligned}$$



(3) 想定病床利用率から必要病床数を算出

$$\begin{aligned} & \text{1 日当たり平均入院患者数の推計値補正後 (1)} \\ & \div \text{ 想定病床利用率} \\ & = \text{新病院で確保する病床数} \end{aligned}$$

(1) 将来の 1 日当たり平均入院患者数を算出

基本構想 13 ページの表から H27 及び R2 の高齢者推計患者数がほぼ同じであるため、元年度の高齢者推計患者数を 343 人とみなして、元年度と各年度の増減率を乗算し、1 日当たり平均入院患者数の推計値 (7) を算出する。

* 1 日当たり平均入院患者数 140.6 人 × 高齢者推計患者数 ÷ 343 人

年度	元年度	7 年度	12 年度	17 年度	22 年度	27 年度	32 年度
増減率	*	357 ÷ 343	357 ÷ 343	343 ÷ 343	322 ÷ 343	294 ÷ 343	277 ÷ 343
患者数 (ア)	140.6	146.3	146.3	140.6	132.0	120.5	113.5

(2) 類似病院と比較した平均在院日数から平均入院患者数を補正

医学の進歩等により、急性期病床における平均在院日数は短縮傾向にあるが、回復期病床においては、地域へ帰っていくためのリハビリの充実により急性期病床に比べて平均在院日数が長くなる傾向にあり、急性期病床から回復期病床への転換により平均在院日数は増加が見込まれる。また下表のとおり、宍粟総合病院は類似の病院と比較しても、平均在院日数が短い傾向がみられるため、類似病院と比較した平均値の増減率を乗算し、1 日当たり平均入院患者数の推計値補正後(イ)を算出する。

○平均在院日数の推移

年度	27 年度	28 年度	29 年度	30 年度	元年度	2 年度	平均
実数	15.2	15.5	15.2	13.4	13.7	14.2	14.8
類似病院	16.1	16.2	16.3	19.8	未	未	16.2

注) 令和 2 年度は 4 月から 11 月の平均値

上記、平均在院日数の推移の表において、異常値(30 年度)を除いた平均値の増減率を算出する。

$$16.2 \div 14.8 = 1.09459 \cdots \underline{9\% \text{ 増}}$$

* (1) で算出した将来の 1 日当たり平均入院患者数の推計値(ア) × 1.09

年度	元年度	7 年度	12 年度	17 年度	22 年度	27 年度	32 年度
患者数(ア)	140.6	146.3	146.3	140.6	132.0	120.5	113.5
増減率	*	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09
患者数(イ)	*	159.5	159.5	153.3	143.9	131.3	123.7

(3) 想定病床利用率から必要病床数を算出 (想定病床利用率: 85%)

病床利用率は、入院が必要な患者の男女等の性差やインフルエンザなどの感染症の状況、個室の部屋数などに左右されること、また開業医からの紹介患者等の安定した受け入れを行うための空きベッドの確保などを考慮する必要があるため、想定病床利用率を 85% と設定し、患者数を病床利用率で割り戻すことにより、必要病床数(新病院で確保する病床数)を算出する。

※(2)で算出した1日当たり平均入院患者数の推計値補正後(イ) ÷ 85%

年度	元年度	7年度	12年度	17年度	22年度	27年度	32年度
患者数(イ)	140.6	159.5	159.5	153.3	143.9	131.3	123.7
想定 病床利用率	*	85%	85%	85%	85%	85%	85%
必要病床数	*	187.6	187.6	180.4	169.3	154.5	145.5

4 新病院の病床数設定

新病院の必要病床数は、上記1から3の観点(地域における役割及び将来推計患者数)で算出した結果、次のとおりとなる。

年度	元年度	7年度	12年度	17年度	22年度	27年度	32年度
必要病床数	*	187.6	187.6	180.4	169.3	154.5	145.5

病床の利用にあつては、午前中に退院し、午後には同じ病床に入院させることもあり、病棟の病床利用率を日単位でみると、100%を超える病床利用率の日もある。

以上のことから、新病院の病床数は、現在の199床から19床削減した、180床程度とする。

病床機能分類は、次のとおりとし、基本設計において最終調整を行う。

- ・急性期病床 95床 → 80床程度
- ・回復期病床 104床 → 100床程度

なお、感染症病床は播磨姫路圏域において充足しているため、感染症専用病床は設けないこととし、新興感染症をはじめとする感染症対策については、感染症拡大時に活用しやすい病床、感染症拡大時に利活用が可能な病床以外の部屋(スペース)等を整備することを検討する。

また、将来において、医療ニーズの変化、人口減少による入院患者の大幅な減少等が顕著となる場合は、他の機能への転換等を検討するとともに、病院改修等が柔軟に可能な病院建築を、基本設計段階から検討する。

※ 病床数の想定は現時点のものであり、今後国の政策や医療環境の変化等を踏まえ変更することがある。

病床機能転換・再編の推移

別紙

期間	病棟	急性期病床	回復期病床	稼働病床数合計	許可病床数	備考
平成30年 3月まで	3階北病棟	40 床		40 床	40 床	急性期許可病床数 150床 回復期許可病床数 55床
	3階南病棟	55 床		55 床	55 床	
	4階南病棟	55 床		55 床	55 床	
	5階病棟		55 床	55 床	55 床	
	合計	150 床	55 床	205 床	205 床	

期間	病棟	急性期病床	回復期病床	稼働病床数合計	許可病床数	備考
平成30年 4月から 令和元年 5月まで	3階北病棟	40 床		40 床	40 床	急性期許可病床数 150床 回復期許可病床数 49床 (休床7床) 機能up
	3階南病棟	55 床		55 床	55 床	
	4階南病棟	55 床		55 床	55 床	
	5階病棟		42 床	42 床	49 床	
	合計	150 床	42 床	192 床	199 床	

期間	病棟	急性期病床	回復期病床	稼働病床数合計	許可病床数	備考
令和元年 6月から	3階北病棟	40 床		40 床	40 床	急性期許可病床数 95床 回復期許可病床に転換 許可病床数 55床 (休床13床) 回復期許可病床数 49床 (休床7床)
	3階南病棟	55 床		55 床	55 床	
	4階南病棟		42 床	42 床	55 床	
	5階病棟		42 床	42 床	49 床	
	合計	95 床	84 床	179 床	199 床	